

日蓮大聖人御書全集

まつのどののにようぼうごへんじ

松野殿女房御返事

げつちゆう うさぎい こと

(月中の兎の事)

新版
2004
〜
2005

まつどののにようぼうごへんじ げつちゆう うきぎ こと

松野殿女房御返事（月中の兔の事）

こうあん ねん

弘安2年（79）6月20日

がつ にち

58歳

さい

まつどのののにようぼう

むぎひとはこ

家

芋

ひとこ

瓜

ひとことう

もの

ろくがつ

麦一箱・いえのいも一籠・うり一籠等、かたがたの物、六月

みっか

た

そうら

いま

ごへんじもう

そうら

三日に給び候いしを、今まで御返事申し候わざりしこと、

おそ

い

そうろう

恐れ入つて候。

みのぶ

さわ

もう

ところ

かいのくに

いい

のみまき

さんかごう

この身延の沢と申す処は、甲斐国の飯井野御牧の三箇郷

うち

はきいのごう

いぬい

すみ

そうろう

きた

みのぶ

たけ

の内、波木井郷の戌亥の隅にあたりて候。北には身延の岳

てん

戴

みなみ

たかとり

たけくも

ひがし

てんし

天をいただき、南には鷹取が岳雲につづき、東には天子の

たけひ

丈

にし

がが

たいざん

岳日とたけおなじ、西にはまた峨々として大山つづきて

白根 たいげ

さる

こえてん ひび

せみ

轉

しらねの岳にわたれり。猿のなく音天に響き、蟬のさえずり

ち満

てんじく

りようぜん

ところ

きた

とうど

てんだいさん

地にみてり。天竺の靈山この処に来れり。唐土の天台山

まのあた

み

わ

み

しゃかぶつ

てんだいだいし

親りここに見る。我が身は釈迦仏にあらず天台大師にて

罷

ちゆうや

ほけきよう

読

ちようぼ

はなけれども、まかるまかる昼夜に法華経をよみ、朝暮に

まかし かん だん

りようぜんじようど

あい に

てんだいさん

摩訶止觀を談ずれば、靈山浄土にも相似たり、天台山にも

こと

異ならず。

うだい えしん

き

かぜみ

染

く

ただし、有待の依身なれば、着ざれば風身にしみ、食ら

いのちたも

ともしび

あぶら

注

ひ

たきぎ

くわ

わざれば命持ちがたし。灯に油をつがず火に薪を加え

いのち

繼

いのちつ

ざるがごとし。命いかでかつぐべきやらん。命続きがた

ちからた

いちにちないしいつか

すで

く、つぐべき力絶えては、あるいは一日乃至五日、既に

ほけきようどくじゆ

こえ

た

しかん

窓

まえ

くさ 茂

法華経読誦の音も絶えぬべし。止観のまどの前には草しげ

りなん。

そろう

おも

よ

たま

かくのごとく候に、いかにして思い寄せ給いぬらん。

うさぎ

きようぎよう

もの

くよう

てんたいあわ

つき

兎は経行の者を供養せしかば、天帝哀れみをなして月の

なか

置

たま

いま

てん

あお

み

つき

なか

うさぎ

中におかせ給いぬ。今、天を仰ぎ見るに月の中に兎あり。

によにん

おんみ

じよくせまつだい

ほけきよう

くよう

されば女人の御身として、かかる濁世末代に法華経を供養

ぼんのう

てんげん

ごらん

たいしゃく

たなごころ

しましませば、梵王も天眼をもつて御覧じ、帝釈は掌を

あ

押

たま

ちじん

みあし

戴

よろこ

合わせておがませ給い、地神は御足をいただきて喜び、

しやかぶつ

りようぜん

みて

伸

おんいただき

摩

たも

釈迦仏は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給うら

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

きようきようきんげん

ん。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。恐々謹言。

こうあんねんつちのとうろくがつはつか

にちれん

かおう

弘安二年己卯六月二十日

日蓮

花押

まつどののにようぼうごへんじ

松野殿女房御返事